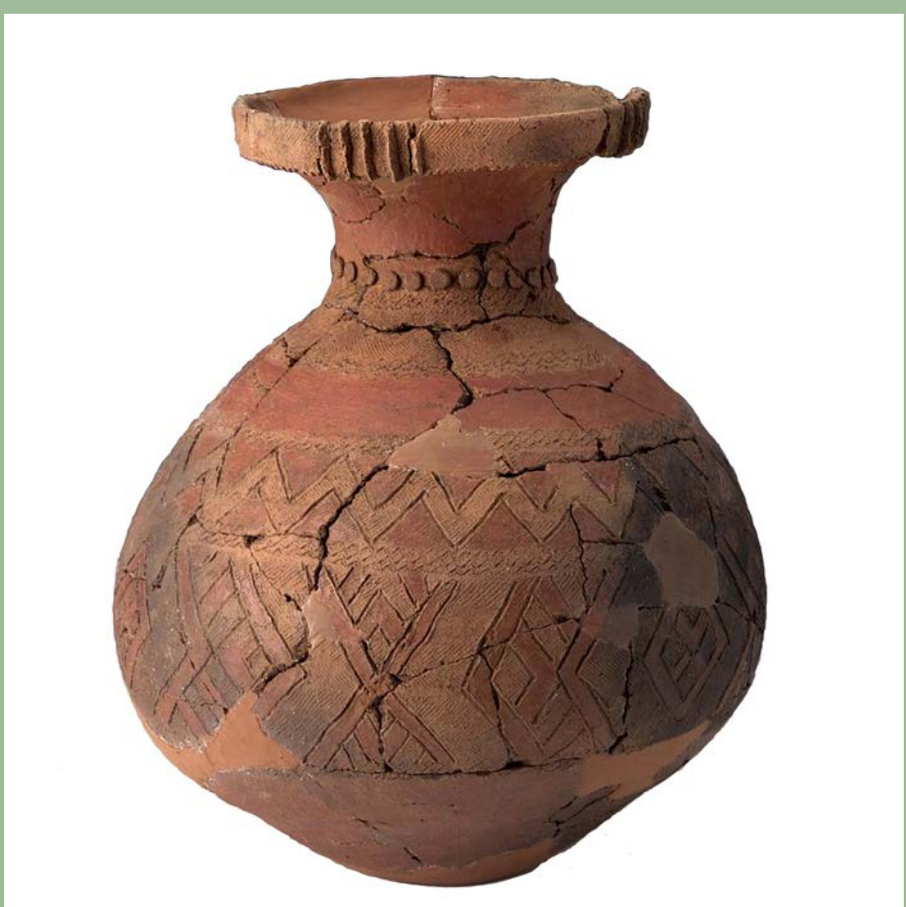
実物はどんなものか見てみよう！

縄文土器（中原遺跡）

主に煮炊きに使われた深鉢形の土器です。胴上半部には、大きな把手がふたつ付けられています。中を空洞にしているのは、重さを軽くしたり、焼きやすくするためと考えられます。胴下半部には、篠竹を縦割りして先端を尖らせた道具で、縦方向にたくさんの線を描き、その上にU字状の粘土紐を貼りつけています。

この土器に見られるような大きな把手は、調理には役に立たないものです。胴から口の部分にかけて渦巻きながらせりあがるモチーフには、呪術的な意味が込められていたのかもしれません。

実物はどんなものか見てみよう！



弥生土器

（横浜市道高速２号線№６遺跡）

主に貯蔵に使われた壺形の土器です。方形周溝墓というお墓から出土しているので、お供えなどの儀式で使われた可能性があります。

胴には、並行する二本の線で山形や菱形など幾何学的なモチーフが複雑に描かれており、その間は細かな縄文で埋められています。口と首の部分には胴と同じように縄文が帯状に付けられており、さらに円形や棒状の粘土が貼りつけられています。また、文様のない部分は赤い色で塗られており、文様を引き立たせています。